

わ じん

4. 和人とのかかわり

こう えき

交易とアイヌ文化

地域産業
国際理解
環境

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展 今、そして未来へ

用語

さくいん



(上)シントコ。



タマサイを首にかけて正装してムツクルを演奏する川上げざ子さん。(上土幌町・東泉園)

トウキ。上にイクバイトンキ。ふだん使ったおわん。(器は帯広百年記念館：1)

擦文文化からアイヌ文化に移っていくと、刃物や矢の先につけるヤジリ、また、煮炊きするためのなべなどが、石器や土器ではなく鉄製となりました。

鉄製品は、本州（や北海道南部）にすむ「和人」から手に入れました。それらをそのまま使ったり、別のものに作り直したりしていたのです。

カムイノミ（神への祈り）などの儀式やふだんの暮らしで使われる、「シントコ」「トウキ」「イトンキ」といったうるしぬりの器も本州から手に入れました。

また、儀式の時に男性が着る「陣羽織」、女性が身につける「タマサイ（首かざり）」のガラス玉や鏡などは、大陸や本州から手に入れていました。（ p112）

そのほか、和人から手に入れたものには、木綿の布、米、酒、タバコ、針などがあります。

北海道からの「輸出品」

アイヌの人々は、本州や大陸のものを手に入れる時、交かん北海道の産物をわたしました。

ワシ・タカの羽やアザラシの毛皮は、古くから、本州で高級品として喜ばれています。そのほか、クマやシカなど動物の毛皮、干したサケ、コンブ、あるいはアットウシ（木のせんいで織られた布・服）などが和人にわたされました。

また、サハリンを通して手に入る大陸の絹織物（蝦夷錦）などが、アイヌ民族の手をへて和人の手に、反対に和人からアイヌ民族の手に入ったものが、サハリンを通じて大陸にまでわたりもしました。



(上)オオタカ。羽は矢羽として、またオオタカ自体が鷹狩りのために求められた。



タカ(オオタカかハイタカ)の羽。

大切な交易が...

儀式から暮らしまで、アイヌ文化の成り立ちにとって、交易はとても大きな意味がありました。

一方、和人にとって、アイヌ民族から手に入るものは、めずらしく貴重なもので、豊かな人々にとって人気の的であり、商売すればもうかるものでした。

これを商売にした和人は、もうかってもうまくいなくても、もっともうけたくくなります。そのためには、何をしてもいいと考える人が出てきます。

大切な交易は、やがて、アイヌ民族を大きく苦しめることにもつながっていきました。



浦幌町、昆布刈石の海岸。アイヌ語で「コンブ・カルウシ=コンブをいつもとるところ」。

1 帯広百年記念館(おひひろひゃくねんきねんかん): 帯広市緑ヶ丘2番地 電話 0155-24-5352 月曜日休館
2 北海道からの輸出品(ほっかいどうからのゆしゅつひん): 18世紀にはいと、瀬戸内

海産の塩がたくさん北海道にやって来ることによって、サケの塩引きの「輸出」が多くなる。これは、江戸など東日本の食生活に変化を与えた。また、コンブなどの「輸出」も増え、これは長崎を通じて日本国外へも再輸出された。